
銀河英雄伝説 “ 朧月の伯爵 ” ローエン格林・フォン・クウィデの記録

杉崎 沙依

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

銀河英雄伝説 “ 朧月の伯爵 ” ローエングリン・フォン・クウイ
デの記録

【Nコード】

N 5 8 2 5 W

【作者名】

杉崎 沙依

【あらすじ】

ある人物の死から一ヶ月。
とある青年歴史学者の元に一通の手紙が届く、その内容は“全てを君に託す”…ある人物からの手紙だった。
その手紙を当てに彼はある人物の邸へ行き、同封されていた鍵である引き出しを開いた。

そして、歴史は遡る…

この小説は「らいとすたっフルール2004」に則って執筆しております。

00・“朧月の伯爵”

ローエングリン・フォン・クウイデの手記より抜粋

新帝国暦 三年 七月 二十六日

先ほど首都星フェザーンから連絡があった。

カイザー・ラインハルト、初代新銀河帝国皇帝陛下が崩御なされたらしい。

…ついに2人の英雄が銀河から消え、1つの時代の幕を閉じた。

そして軍務尚書殿も亡くなったそうだが、これのことはどうでもいいが不運だな。

ともかく私は今すぐフェザーンへ行こうと思う。
ヘルモントに乗るのは久しぶりだ。

新帝国暦 三年 八月 二日

フェザーンへ着いた。

カイザー崩御から一週間、何処と無く街の空気は…重い。

国葬の準備の最中のカイザーリン・ヒルデガルドにこれからの帝国の統治に協力して欲しいと頼まれたが、私には荷が重いと丁重にお断りさせていただいた。

そして生後2ヶ月のプリンツ・アレクの顔を今日初めて拝見した。
大丈夫、父親ゆずりのカリスマ性と母親ゆずりの聡明さを持ち合わ

せた素晴らしい方に成長なさるだろう。
今から楽しみにしておくでしょう。

新帝国暦 三年 八月 三日

国葬の準備を手伝っている。

儀式化したい気持ちは分かるが、そんなことはカイザーは望んでおられない気がする。

ミッターマイヤー元帥にもカイザーリンと同じことを頼まれ、断った。

ただカイザーリンの時より大変だったが…許せ、ミッターマイヤー、これにはちゃんとした理由があるんだ。

フラウ・ミッターマイヤーは今日も可愛らしかった。

新帝国暦 三年 八月 四日

明日、カイザーと軍務尚書殿の葬儀が行われる。

カイザーの遺言によって昇進したビッテンフェルト、ワーレン両元帥に夕食に誘われたので一緒に過ごさせてもらった。

話の内容は…言うまでもあるまい。

帰りにユリアン・ミンツを見掛けた。

彼は今後どの道を選ぶのだろうか…

新帝国暦 三年 八月 五日

国葬が行われた。

今日はあまり語りたくない。

新帝国暦 三年 八月 十二日

国葬から一週間が経った。ユリアン・ミンツ達は国葬の四日後に一人を除いて全員がハイネセンへ帰って行った。

そして本日付けで、私は旧クウィデ伯爵家の領土へ帰ることになっている。

もうしばらくは皆とは会わないだろう。

次会うのは誰かの国葬、もしくはすっ飛ばしてヴァルハラだ。

さらば、友。

さらば、フェザーン。

さらば、私の愛した歴史の英雄達よ。

新帝国暦 四十三年 一月 某日

先日、ミッターマイヤー国務尚書の国葬が執り行われた。

私は…出席できなかった。

否、出席しなかった。

気がつけばあの男が死んでもう四十年、そういえば季節七年の瀬迫るあの時期。

結局カイザーの国葬以降、私はフェザーンの地を踏むことは無かった。

プリンツ・アレクは今やカイザー・アレクとなり、彼の隣には実父と同じ色のマントを羽織る青い瞳の元帥。

ミッターマイヤーもさぞ満足にヴァルハラへ赴いただろう。

こうしてあの時代を知る者はもう私だけ。

皆、居なくなってしまった。

新帝国暦 四十三年 二月 某日

前よりフェザーンの出版社の頼みにより書き進めていた本が、来月出版されるらしい。

内容は“ローエングリッ・フォン・クワイデから観たゴールドンバウム朝の滅亡とローエングラム朝の興り、そして彼の生い立ち”…つまり自叙伝のようなものだ。

話が来たときは驚いたものだ、まさかこんな端くれ者に本を書いてくれなどと…

その話を持って来たのは、東洋系の顔立ちの三十にも満たないであろう青年だった。

名前は確か…ヤン…そう、ヤン・ウェンリー。

まさかと思った、あの英雄の片割れと同じ名前の東洋人。

そして驚きと同時にどこか、何かを歓喜している自分がいた。

だからだろう、真剣に頼んでくるヤン青年の頼みを承諾してしまったのは。

後に彼から聞いた話だが、彼は出版社の人間ではなく、若輩者の歴史学者であり、学校の後輩のジャーナリストに頼まれて来たらしい。最も、自分も私の話を聞きたかったからだと話していた。

：ヤン・ウェンリーは本当は歴史学者に成りたいと思っており、彼の後輩ダステイ・アッテンボローはジャーナリスト志望だったことを今、思い出した。
もしかして彼らは二人の生まれ変わり…？
いや、考えすぎか。

それにダステイ・アッテンボローに関しては歳が合わない。

では今日はもう寝るとしよう。

少し疲れた、しっかり眠った方がいいな…

おやすみ。

ローエングリン・フォン・クウイデ、享年七十二歳。
死因は睡眠薬の過剰摂取。

エルネスト・メックリンガー元帥を中心に編集された歴史書には記述は少ないものの、以下のように記されている。

“ 内政の天才であり、少なからずもカイザー・ラインハルトを助けた。

ゴールデンバウム朝最良で最後の気高き伯爵家当主

軍事面でも才能を発揮し、ローエングラム朝の成立に尽力した

磨き上げた黒曜石の如き艶やかな黒髪に、アメジストのような美しい瞳を持つ。

ジークフリード・キルヒアイスには及ばぬも長身で、その立ち姿はまるで夢物語に出てくる姫に忠誠を誓う騎士の様

そして我々が忘れてはならぬ、もう一人の英雄 ”

記述の少なさと彼の旗艦の名前から、後世の歴史家達は彼をこう呼んだ

“ 朧月の如き英雄 ”

“ 朧月の伯爵 ”

と。

01・青年歴史学者（前編）

新帝国暦 十四年 六月 一日

それは私、ヤン・ウエンリーがフェザーンにて産声を上げた日である。

私の父はフェザーンで昔から酒屋を営んでいて、母はバライト星系・惑星ハイネセン出身のピアニスト。

幼い頃の私は、それをなかなか奇妙な組合せだと思っていた。

あのフェザーン商人を相手にしてきた父と、帝国に負けて何とか自治を認めて貰っている自由惑星同盟の残党が治めるハイネセンで育った母。

自分の実の親に言うのもなんだけど、母はともかく、どうして父が母を選んだのか、浅知恵な子供には全く検討がつかなかった。

今思うと、父の客である商人や軍の下級士官の一部の品の悪い人達の影響が強かったんだと笑えるんだけど、当時の私は本気でそう考えていた。

そして十歳になったばかりのある日、そんなヤン君の考えを大きく改めさせ、私を歴史研究の道へ引きずり込ませるちょっとした事件が起こる。

その日私は両親と喧嘩をして家を飛び出した。

原因は私、最初はただ母の言葉に反論していただけだったが、つい口が滑って自由惑星同盟を乏した、思いつきり乏して、ついには二人の結婚が理解出来ないと言ってしまったんだ。

パシィン

その瞬間右頬に鋭い痛みが走る。

「いい加減にしろ、ウェンリー!!」

父だった。

まだまだ精神面で未熟だった私は、勢いに任せてそのまま家を飛び出した。

悔しい、悔しかった。

今思い返せは何が悔しかったのかは思い出せないけど、悔しさと別に悲しかったのは覚えてる。

走って走って、ただ遠くへ行きたくてひたすら走り続ける。

気がつけば日も暮れて、辺りは真っ暗。

見覚えのあるような気がする大通りにも人一人歩いていなかった。

そこまできてようやくヤン君は後悔した。

寂しさで目の前が霞んでくる。

誰もいないけど、誰かに涙を見られるのが嫌で、締まったシャッターに背中をもたれて膝に顔を埋めた。

カシャン

シャッターの音が暗闇に静かに響く。
胸の辺りがキュッとなった気がした。

それからどの位たった分らない。

「どうしたんだい、僕？」

不意にかけられた言葉に反射的に顔を上げる。
しまった！泣いてたのがばれる！！

「僕：家出かい？」

「…うん」

優しい声だった、顔は暗くてよくわからないけど、その声色だけで私をどれだけ心配しているのかは十分に伝わってくる。

「喧嘩、した」

「………」

「パパに：今日はじめてぶたれた」

たぶんこの人はヤン君が泣いてたのには気づいていただろう。
それなのに、ただ無言で私の頭を撫でてくれた。
温かくて、しっかりとした男の手。

私は全部話した、自由惑星同盟を乏したこと、母と父の結婚のこと…

全てを話し終えて、ヤン君は暗闇でよく見えない男の人の顔を見つめた。

何かを言っただけだったんだと思う。

しばらくすると彼は私の肩に手を置いて話し始めた。

「違うよ、自由惑星同盟の人達はお情けなんかじゃない、実力行使で自治をもぎ取ったんだ」

「もぎ取った…？」

「そうだよ」

「なんで？だって負けたんでしょ同盟は」

「…国は負けても一部の人は負けなかった、君はヤン・ウェンリーという男を知っているかい？」

その問い掛けにヤン君は頷いた。

“ヤン・ウェンリー”、知らない訳がない、私と同じ名前の同盟最高の名将で“ミラクル・ヤン”“ヤン・ザ・マジシャン”と呼ばれた男。

確か最期は帝国軍の胡散臭い宗教に洗脳された兵士に暗殺されたと父が教えてくれたのはつい最近のことだったはず。

「彼は、同盟が滅んだたった二ヶ月後に、ハイネセンから抜け出して民主主義の為にまた戦場に立った」

「……」

「同盟が敗ける前もそうだったが、敗けた後もあの男のお陰で我々は散々苦い思いをしたよ」

「…お兄さんは軍人なんですか？」

思いがけず聞いてみると、ぎこちない笑い声と共に「昔ね」と答えてくれた。

「話を戻すけど、そのヤン・ウェンリーが死んだ後彼の養子のユリアン・ミンツが後を継いだ。そして最終的には血塗れになってカイザー・ラインハルトの元へたどり着き、カイザーの死後正式に自治を認められたんだ」

彼の懐かしむように話す話しに夢中で気づかなかったが、肩に置かれた手はいつの間にかまた私の頭の上にある。

「歴史はね、常に勝者や権力者の都合のいいように誇張したり、時には改竄されることもある。正しい歴史を知るのはその時代を生きる人間だけ……いや、絶対的な正義などが無いのと同じで、正しい歴史なんてものも無いのかも知れないな……」

その言葉は、当時浅知恵で未熟な十歳の私に強い衝撃を与えるに十分だった。

“正しい歴史など無い” それは、メックリンガー元帥達が作った歴史書さえも否定する言葉。

この瞬間にヤン君の、私の将来は決まった。

「閣下!!」

急に、また知らない声が私とお兄さんの鼓膜に響いた。

声のした方を見ると、誰か二人程が走って近づいてくるのが見える。

「フェリックスにバイエルライン、どうした？」

「“どうした” じゃないよ父さん、急に地上車止めさせたと思ったらどっか行っちゃうんだもん」

「そうですよ閣下！せめて一言・・・閣下、この子は？」

背の高い方の男の人がヤン君に気づいた。

「ああ、どうやら家出をしたみたいなんだが・・・そうだバイエルライン、卿がこの子を家まで送り届けてやってくれ」

「え、しょ小官がですか！？」

「そうだ、よろしく頼むぞバイエルライン上級大将」

「で、ですが・・・」

「上級大将閣下、私が國務尚書閣下を無事邸まで送り届けますのでご安心を」

「・・・分かりました、では閣下を頼むぞミッターマイヤー少佐」

「はっ！！」

「そうか、では行こうかフェリックス。僕、じゃあね」

「あ・・・はい」

そう言うとお兄さんは背の低い方の男の人を連れて去っていった。

「・・・」

「・・・」

「.....」

「えっと、僕、お名前は...?」

「...ヤン・ウエンリー、同盟の英雄と同じ名前だよ」

それからのことは覚えていない。

その時の私の頭の中は大変なことになっていから仕方ないと開き直るってみる。

なんせ今まで話していたお兄さんは、歳としては立派なおじさんでしかも国務尚書、そして今日の前に居るのは高級軍人、上級大將なんだから。

これで驚かない方がどうかしているよ。

臆気に思い出せるのは、その上級大將さんに送られ、家に着いた後からだ。

ぎこちなく玄関のドアを開けて入り、「ただいま...」と言った瞬間、両親に同時に抱きしめられた。

母さんには泣きつかれ、父さんはひたすら「ごめんな」と言ってくる。

ある意味生き地獄。

私が今日のことを謝っても解放されず、最終的には疲れきったヤン君がそのまま寝てしまった後もしばらく離れなかったらしい。

後で聞くと、私が帰ってきたのは深夜二時過ぎのことだったそうだ。

それからの私は、当時の友人に“変な扉を開いた”と言わせる程歴史の勉強に没頭した。

歴史書を片っ端から読み漁り、正史として編集されたものに至って

はほぼ丸暗記。

そして十五になり、基礎教育が終わると、バラード星系惑星ハイネセンにある高等教育学校への進学を決めた。

帝国で教える歴史はもう知り尽くしているから今度は旧敵の教える歴史を学ぼうじゃないか、そう考えた末の決断。

父も母も喜んでくれた、向こうでは母の恩師の知人の世話になることになっていたから、私に対してあまり心配することが無かったからだと思う。

そうして“ハイネセン第一高等教育学校”を卒業後、フェザーンにある“ブリュンヒルト帝国総合大学・総合歴史学部戦史科”を専攻し、さらに大学院に二年間、その卒業後は准教授として現在の総合大学に居座っている。

そんなヤン君：もとをいい私、ヤン・ウェンリーにハイネセン時代の後輩、ダステイ・キップリングから依頼があったのは、准教授として勤めて二年たった頃のことだった。

今彼は、フェザーンにある出版社で編集者やライターをやりながら有意義な生活を送っている。

そんな彼が持ちかけてきたのは“ローエングリン・フォン・クウイデ”の自叙伝についてだった。

「クウイデ伯に執筆依頼を頼みたいんで、先輩、お願いします。クウイデ伯の話聞けるんですよ？先輩にも悪い話じゃない」

確かに悪い話じゃない。

彼に関しては正史でも記述が少なく、彼自身は旧領土の辺境惑星に居るためなかなか話を聞きに行く人もいない。

でも一番の理由は彼なんかよりも、まだ存命しているウォルフガング・ミッターマイヤー国務尚書やナイトハルト・ミュラー元帥など

のほうがかイザー・ラインハルトに近く、ローエングラム朝の重鎮だからだ。

ともかく、私は二つ返事で彼の依頼を承諾した。

02・青年歴史学者（後編）

キップリングの依頼でクウイデ伯を訪ねたのは、八月も始めの五日だった。

旧首都星オーディンから近からず遠からずといったところにあるクウイデ伯爵家旧領土“惑星リユーベック”に彼の邸宅はある。

“リユーベック”と言えば、今はもう滅んだゴールデンバウム朝銀河帝国と自由惑星同盟の最後の戦い『バーミリオン会戦』において当時大将だったナイトハルト・ミュラー元帥の“最初”の旗艦と同じ名前だ。

調べてみると、“リユーベック”というのは地球時代のある都市の名前らしい。

それはさておき、ゴールデンバウム朝時代のカイザー・ラインハルトがまだミューゼル姓だった頃、ローエンGRAM姓になった彼が全権を掌握した後に行った政策と殆ど同じものを当時既に領地内で行っていたという。

これは、クウイデ伯が“内政の天才”と云われる由縁の一つである。

私もリユーベックに着いてからしばらく街中を散策し、当時の頃を知る人に話を聞いてみた…

「カイザーは伯のを真似ただけ、戦争の天才でも内政は凡人だ！

今の帝国があるのは伯のお陰さ！！」

…らしい。

そんなこと言って不敬罪に当たらないだろうか、心配だ…。

兎も角、私は今その伯爵邸の門の前に立って圧倒されていた。

どうやら伯爵という旧時代の階級をなめていたようだ・・・想像以上でかい、屋敷が。

でも、ずっとここに突っ立っている訳にはいけないので、意を決して門を潜った。

…やはりというか、随分と立派な庭にまた圧倒され、思わず頭を抱えてしまう。

伯爵家と平民の生まれの違いに軽く溜め息を吐き顔を上げて辺りを見回すと、一人の綺麗な女性が石畳の先にある玄関に立っているのに気付いた。

「ヤン・ウェンリー様ですね？」

「へっ…？」

突然その女性に声をかけられ、驚いてつい間拔けな声が出てしまった。

なんてこった、こんな美人の前で、格好がつかないじゃないか。そんな自己嫌悪に陥っていると、かの美女からまた話しかけられた。

「あ、あの私、エレイン・ハイゼと申します。グリーンおじさまに“英雄の片割れと同じ名前の東洋人の男が来るから、迎えてやってくれないか”って申し付けられましたので・・・あの、えっと、驚かすつもりではなかったのですが…申し訳ありません・・・」

ワインレッドの端正な眉が下がり申し訳なさそうに真っ直ぐ見つめられ、私の中に渦巻いていた一種の自己嫌悪が居たたまれなさに変わった。

「ああ、いや大丈夫ですよ、ハイゼさん」

“貴女に見とれてたから驚いたんです、まさかこんな美人に話しかけられるなんて思ってもいませんでしたから”と続けそうになって止めた。

女性にこんなことを言うなんて、私らしくないじゃないか。と言つても、あんなに綺麗な人が悲しんでる姿を見るのは…。

ああもう、本当に調子が狂う。

そこまで考えて、ふと、思い至った。

「もしかして先日お電話した時も…」

「え？…ああ、貴方の電話を最初に受けたのも私でしたね」

やっぱり、声が似てると思った。

さつきから調子が狂ってばかりだけど、彼女のその暖かみのある柔らかな声を聞くと、それもまた悪く無いような気になる。

「では、客間までご案内いたします」

「ありがとうございます」

お互いに細かい自己紹介をしながらフロライン・ハイゼについて行く。

案内された客間は、建物の二階、丁度玄関ホールの真上に位置していた。

私はそこで、黒革張りの高級そうなソファーに腰掛け、使用人の方から出されたこれまた高級そうなカップに入った、やっぱり高級そ

うな紅茶を呑んでクウィデ伯を待っている。

エレインは私を案内するやクウィデ伯を呼びに行く、と一言断りを入れて部屋を出ていってしまった。

残念、もう少し話して居たかったが…まあ、仕方がない。

トントン

ドアをノックする音に、慌てて立ち上がる。
そして、ゆつくりと、ドアが開いた…

「初めまして、ヤン・ウェンリー君」

…一瞬、時間が止まったような錯覚に陥った。
何とも言い難い、不思議な感覚。

そして私は、その時、こう思ったんだ。

“私は、今日、この瞬間を、一生涯忘れることは無いだろう”
と。

ほんの二年半程の交流だったけど、その二年半は今までに無いほど充実していた。

彼ほどの付き合いができる相手は、もう二度と私の前には現れないだろう。

新帝国暦四十三年　二月　某日

私は今、惑星リユーベックの地を踏みしめている。

今までにも何度も来ているが、今回ばかりは同じ様な気持ちにはなれない。

今日は、クウイデ伯：いや、グリーンさんの葬儀の為にここに来たんだから。

エレインから連絡があつた時、暫く何も反応が出来なかった。

ミッターマイヤー国務尚書が亡くなってから、まだ二ヶ月しか経っていないのに。

信じたくはなかった、でも受け入れるしかない。

そう心に決めて、私は今ここに立っているんだ。

葬儀自体は、喪主はエレインが務め、リユーベックを含む旧領惑星の住民の代表者達、そして私をはじめとするほんの僅の部外者だけで行われる。

エレインの話では、国の方から国葬の打診が来たらしい、でも生前のグリーンさんの“私が死んだら、周りがなんと云おうが国葬だけは止めてくれ”との言葉から断つたと言っていた。

そして、代わりに国家の重鎮が一人、代表として来るそうだ。

国家の重鎮：一体それは誰なのだろうか…。

兎も角、私は真っ直ぐグリーンさんの屋敷へと足を運んだ。

葬儀が始まるまで、まだ多少時間がある。

棺に入ったグリーンさんの隣に、喪服に身を包んだエレインがポツンと立っていた。

その後ろ姿はやはりどこか寂しそうで…。

「エレイン」

「…ウエンリー、来てくれたんだ」

「当たり前だよ、来ない理由がないからね」

「ありがとう…おじさまも喜ぶわ」

「…これから、どうするんだ？」

「うん、とりあえず、おじさまの残してくれた財産をなんとか整理しなきゃいけないから、…それから、考えようと思ってる」

「…あの、さ…もし君さえよければ」

“フェザーンで暮らさないか” 私はそう言おうとした。
こんな状態のエレインを放って置くことは出来なかったから。
でも…

「私は、大丈夫だから」

「………」

思わず“大丈夫じゃないじゃないか” そう言いそうになって止めた。
これは彼女が決めたこと、私が口を出す必要はないんだ。

「使用人の皆さんも居る、だから…本当に、大丈夫だよ」

「…分かった」

それでも、少しで良いから自分を頼って欲しいと思うのは、私の我が儘だろうか。

今日のリユーベックの天気は曇り。

淀んだ空が薄気味悪くて、私は残りの時間を宿で過ごすことにした。葬儀を終えた次の日、朝一番の便でフェザーンへと戻ろうとした。勿論、エレインへの挨拶は忘れずにしたから問題はない。

が、駄目だった。

世の中上手くいかないことは百も承知だが、まさか最後の最後で昨日避けに避けまくった国家の重鎮様に捕まってしまうなんて…。

「久し振りだね、ヤン・ウェンリー君。…覚えているかな？」

正直に言おう、確かに閣下とはお久し振り、約十八年振りでちゃんと覚えている、あの日のことは忘れる訳がない。

でもあの時、閣下のお義父上殿とあの上級大将さんとは会話をしたけど、貴方は私に話しかけもしないで故・国務尚書閣下とさっさと帰って行ったじゃないか！

「…勿論です、フェリックス・ミッターマイヤー元帥」

だから、元帥閣下が私を覚えていることに驚いたよ…本当に。

「ふふ…そんなに畏まらなくても良いんだぞ」

「は、はあ…」

誰のせいだ、誰の！
って船の時間が…まずいな。

「あの」

「確か今はブリュンヒルト大学の准教授をやっているそうじゃないか、大したものだ」

「え？はあ、恐縮です。…よくご存じですね」

「父さんが生前、君の論文を目にしてね」

「… 国務尚書閣下が、ですか」

「ああ、そうだよ。高く評価していた、良い観点から捉えているって。… たしか私の実父についての論文だったかな」

「…!!… ロイエンタール元帥の…」

やはり見る人によって違ってくるのか…。

“良い観点”… もしかしてあの論文は彼の知るオスカー・フォン・ロイエンタールに近い所があったのかも知れない。

でもあの論文、教授達には鼻で笑って一蹴されたけど…。

一体、どんな伝で手に入れたんだろう。

ちなみに私は“ジークカイザー、例え死すとも”派だ。

「でも、まさか君がクワイデ伯とも知り合いだったなんてね……所で、君を見込んで頼みたい事があるんだか…」

「えっ？」

そんな話をしている間に船が出航してしまったので、おそれ多くも元帥の船“アロンダイト”に同船させてもらった。

…やはりというか、随分と立派な内装や装備に圧倒され、思わず頭を抱えてし…あれ、デジャブ？

それから一ヶ月経った頃のこと。

私は家で、二年半前のと比べて軽く十倍程増えた荷物に埋もれながら、フェリックス・ミッターマイヤー元帥に貸して戴いた、大変貴重な資料を元に『帝国の双璧』に関する論文を書いていた。

…お分かりだろう、これが元帥からの依頼だ。

普段は大学の研究室でこういう作業はやっているんだけど、資料が資料なもので、ついつつかり生徒や他の教授、准教授達に見られたら堪らない。

だから多少の不便を承知して家でやっているんだ。

更にこの論文はカイザーアレクも読む、というか読ませるそうなので、日々神経を尖らせながら書く始末。

結果、色々煮詰まり、いい加減奇声を発したい…というか叫びたい衝動に駆られた時、大学から一本の電話があつた。

「ヤン准教授宛にお手紙が届いているので取りに来てください」

…私に手紙？

しかも何で大学の方に？

疑問を抱きながらも、気晴らしに丁度良いと、その手紙を取りに行った。

大学の事務室でそれを受け取って裏返すも、なぜか差出人の名前が書いて無い。

家に戻った後、困惑しながら封を開け、目にした文字には見覚えがあった。

「…グリーンさんの字…」

何故…？

何故、今頃になって彼から手紙が届いたんだろう。

そして、何のために…。

更に膨らむ疑問を胸に潜めてそれを読もうとした時、封筒に何か入っていることに気がついた。

「これは…何かの鍵…かな？」

おそらく銀製であろうそれには、クウイデ家の紋章が形どられている。

手紙になにか書いてあるかもしれない。

そう思って私は、急かされる様に文面に目を通した。

「ウェンリー！？…急にどうしたの？」

「エレイン！金庫、鍵がなくて開かない金庫はないか？」

あの手紙を読み終わったあと、どうも論文を呑気に書いている気にはなれなくて、私は急いで荷造りをして、翌日にはリユーベックへ向かった。

「え？金庫？…金庫はないけど、おじさまの書斎にある机の一番下の引き出しが鍵がかかったまんまだった」

「それだ！！」

「…落ち着いてウェンリー、なにかあったの？」

エレインにそう言われて、はっと我に帰った。

「あー…実は格林さんから手紙が届いて…」

「おじさまから！？」

「うん、それに鍵が同封されてて…ああ、あとエレイン！」

「な、何？」

「あとで大切な話があるんだ…」

私としては、大切な話の方があの鍵のことよりも大事なことだった。

グリーンさんから手紙には長くはない文章で二つのことが書かれていた。

一つは、

“その封筒に一緒に入っているのは、私の過去の日記や思い出の品が入っているものの鍵だ。

…私は君にそれらを託そうと思っている、ついでに書斎にある旧王朝時代の歴史書達もね。

君の歴史研究に役立つってくれるは幸いだ。
”

二つ目は、…私を後押し、というか覚悟を決めさせてくれる内容だった。

…何の、とは愚問だよ。

「…そう、おじさまがそんな手紙を…」

私が手紙の内容について話すと、彼女は少し驚いてみせた。

「来た時には私も驚いたよ。エレイン…本当にいいのかい？」

「いいに決まってるでしょ、おじさまが決めたことだし。それに私なんかよりウエンリーが持ってたほうが絶対役にたつもの」

「それもそうか」

「ええ。それより早く開けて見ましょう、私もおじさまの昔のものって見たことないの」

「そうだね、じゃ、行こうか」

そうして私たちは書斎へ向かった。

途中ですれ違った使用人の、私たちを見る目が生暖かったのは気のせいと思いたい。

この一ヶ月前はこんな気はしなかったんだけど…やはり気の持ち様かな。

「これよ」

エレインが指すそれは何度かこの部屋に入ったことのある私には馴染みの木製の執務机だった。

当時中将だった先代当主、ガラハッド・フォン・クウィデが退役する時に自分の執務室の机を“愛着があるから”と軍から買い取ったものだと言った。グリーンさんが話してくれたのを覚えている。

「どれどれ……よし、開いた」

そこには隙間が無いほど恐らく全て日記であろう本が敷き詰められていた。

その中から一冊を抜き取ると、中から何か紙が滑り落ちた。

「あ、…写真？」

裏返しに落ちたそれを私はそのまま拾った。

「えーっと…」

“485年

イゼルローン方面哨戒任務
初代クウィデ艦隊幕僚陣

旗艦ヘルモント艦橋にて”

…ですって」

後ろから覗き込んできたエレインが裏面に書き込んであった文字を読み上げてくれた。
そのまま裏返す。

「うわぁ…」

思わず声を出してしまった。

悪い意味じゃなくて良い意味でもない、単に何て反応すればいいか判らなかつただけで。

「おじさまと父さんと…あっ！」

エレインも気づいた様で、途中で言葉を詰めた。

「…おじさまって凄いわよね、色んな意味で」

「あはははは…」

とりあえずその写真は日記の適当な所を開いて、そこに挟んでおくことにした。

あの写真のお陰で私とエレインのさつきまであった探索意欲は消え失せてしまい、私達は顔を見合わせて苦笑した。

「所でウェンリー、“大切な話”って何？」

「えっ！？そ、それは…」

急なエレインの問いに少々焦りながら、私は左手を上着のポケットに突っ込んだ。

大丈夫、いける。

ポケットの中身を握りしめ、深呼吸を一つ。

「エレイン、実は…」

数ヶ月後、私達は結婚した。

02・青年歴史学者（後編）（後書き）

次回からローエングリン・フォン・クワイデ伯爵（以後グリン）が登場します。

そしておめでとう、ヤン&mp・エレイン。

もう君達の出番がある予定は無いよ ヽ

更新速度は相変わらず遅いですが、お付き合いしていただけると幸いです。

03・クウイデ中將

スクリーンに映し出される限り無い空。

その空には酸素を始めとする、生物の生存に必要な空気が存在しないために黒く塗りつぶされている。

その黒い空は“宇宙”と呼ばれており、まだ人類が小さな星の上で戦いに明け暮れている時代から人々の心を魅了する存在であった。

そして現在、それは手に届く範囲のものになっていた。

当然のように星と星とを駆け回る宇宙船。

過去の時代の誰もが一度は夢見た光景がそこには広がっている。

もし、前時代から大きく変化を遂げている今の人類社会を過去の私達の先祖達見たらどの様に思うのだろうか…

「…羨ましかるかもしれませんね」

と、少佐の副官は答える。

「小官でしたら、喜ぶと思います。例えば、自分の死後の遠い未来のことだとしても」

小柄な大佐の参謀は言った。

「いつそ、呆れるものではありませんか？ 未だにこいつらは戦争をしているのか」と

先ほど彼とは対象に背の高い、同じく大佐の参謀は皮肉を言った。

「そう言う閣下はどうお考えで？」

ワインレッドの髪の少佐は己の上官に問いかける。

問われた彼は、その紫色の瞳を広大な黒い空を映すスクリーンにや
った。

「僕かい？僕は…」

スクリーンから目を離し、目の前の三人に視線を移す…

「こんだけ先の時代の癖に未来にも過去にも行く手段がないじゃないかって、文句つけてくると思うよ」

そう言って笑った。

ローエングリン・フォン・クウィデはこの年二十六歳。
伯爵家の三男として生まれる。

自分意思で軍人を志し軍幼年学校に入学し、首席で卒業。
二十一歳の時、当時少将だった彼は家督を継ぐ為に退役。
その時二人の兄は既にこの世に存在してはいなかった。

先のヴァンフリート星域での戦いにおいてグリーンメルスハウゼン艦
隊の参謀長としておよそ五年振りに現役復帰し、その後中将に昇進
した。

現在はグリーンメルスハウゼン艦隊を受け継ぎ、クウィデ艦隊として
イゼルローン方面の哨戒任務に当たる予定である。

はじめは前艦隊旗艦のオストファーレンをそのまま旗艦として使用する気でいたクウイデ中將だが、いらない氣遣いとしない期待、そしてあまりにも艦の老朽化が進んでいるために新造艦を旗艦として押し付けられたのである。

あくまでこれはクウイデ中將からの感覚であるが、おそらく間違っていることはないだろう。

実際、大將への昇進は問題であると高級軍人達の間では囁かれ、ミユッケンベルガー元帥などは皆には言わないものの自身の中では次の会戦の際には彼の艦隊を参加させる気である。

そしてその新しい旗艦の名は“ヘルモント”。

少々薄い黒に塗装され側面に長さの違う薄黄色の横ラインのペイントが施された外装で、艦首主砲の数が従来の旗艦と比べて少ない代わりに機動性に優れ、装甲が強化された艦である。

彼曰く、我慢強くて速いが力弱い子。

と多少の文句をつけながらもやはり新造艦を渡されたのは嬉しいようで、何かと艦の私室に物を持ち込んでいるところを彼の副官に目撃されている。

その副官ヴェルナー・ハイゼはこの年二十三歳。

クウイデが少將として復帰した当時に大尉として彼の副官になり、少佐に昇進した現在もそのまま彼の元で働いている。

実を言うとハイゼ家は、平民ながらもクウイデ伯爵家に彼の祖父の代から使えていおり、ハイゼ少佐が彼の副官になるのは当然のことなのだがその事実を知る者は多くはない。

その二人は現在宇宙空間ではなく、首都星オーディンにて自身の艦

隊の人事に頭を悩ませていた。

「閣下、とりあえずが参謀長がコッセル少将で副参謀長にモムゼン准将でよろしいですか？」

「それで良いよ、他に適任がいるわけでもないし。分隊司令官もこの三人のままで良いとして、他の参謀をどうするかなあ……」

グリーンメルスハウゼン艦隊の時、参謀は彼以外に三人いた。

副参謀長のコッセル准将、モムゼン大佐、ベーリング中佐である。

この内ベーリング中佐は大佐に昇進の際に転属となっており、クウイデ自身は中將に昇進して艦隊司令官になっているので残る参謀はこの二人だけなのだ。

「欲を言えばあと三人欲しい……」

「三人ですか？二人ではなくて」

ハイゼはむむむ……と言いながら考え込む自身の上官を不思議に思った。

前の参謀は四人だ、どうして増やす必要があるのか……と。

「正直僕だけでやっていける自信がない、だったら参謀を増やして仕事の効率を上げたいんだ。それならもしもの時にコッセルやモムゼンを臨時分隊司令官にしても支障がないだろう」

「要するに樂をしたいと」

副官の容赦ない指摘にクウイデは苦笑した。

「…ご明察で」

「まあ駄目とは言いませんが…宛がある訳でもないでしょう？」

そう、彼らの一番の懸念事項はそこである。

クウイデはヴァンフリードで復帰したばかりで知り合いの軍人が少なく、ハイゼは今までずっと憲兵隊を始めとする軍務省勤めで実戦組とは縁がないのだ。

「いつそ元帥にお願いするかなあ…でも宇宙艦隊司令長官の仕事が忙しいだろうから…」

またも考え込む黒髪の上官の言葉を聞いて眉を潜めると、ハイゼは疲れたような声で提案した。

「だったら人事局長にお願いするのはいかがですか？」

もつともである。

「あ、そっか」

「それに人事の話しは人事局、軍務省の管轄ですよ」

溜め息をつくハイゼ他所に、クウイデは嬉々とあの人事局長に頼む人選の条件を頭のなかで考えていた。

目の前に三人の佐官の資料がある。

その内二人は大佐、残るもう一人は中佐だ。

問題は大佐の二人。

…別に人事局の人選に文句をつける訳じゃない、そうじゃないんだけど…。

「ミッターマイヤー大佐とロイエンタール大佐、か」

あの人達もまた随分な人選をしたなあ。

後の“帝国の双璧”を参謀に選んでくるなんて。

それも僕が“転生者”故か、それともただの偶然なのか…。

そんなことを考えながら、僕は思考を過去の記憶へとばした。

基本的にどんなことも鮮明に憶えている、これは僕が僕である前もそうだった。

昔の僕は特に何があるわけでもない東洋人の一般家庭に産まれた。父親は会社勤め、母親は専業主婦というやつだったと記憶している。

僕自身も、記憶力を除けば一般的な子供だった。

そしてそのまま何事もなく中学に入学した、その頃からだろうか、周りの友人や教師達とギクシャクし始めたのは。

中学に通っていた始めの頃はその理由が理解できなかったけど、高校に上がる三年の頃になるとなんとなく理解しはじめた。

あの人達は僕の異常な記憶力をやっかんんでいるんだ、と。

しかし、奨学生として進学した某名門私立高校では、やっかむ人より僕をライバルや目標とする人の方が圧倒的多数だった。当時、自称ライバルの友人が僕にこう言ったことがある。

「馬鹿みてえに記憶力が良いくせに滅茶苦茶勉強するんだもんな、そりゃ入学時から首席をキープできる訳だ」

でも次こそお前に勝手みせるぜと言った彼は、昔の都があつた場所にある大学に進学していった。

僕は彼の言葉に今更ながら自身の記憶力がとんでもないことに気がついた。

そして彼と違って目標が無いことにも。

一年の時の進路希望調査には適当に一流大学の名前を書きなぐったけど、僕はそこに行きたくて書いた訳じゃない…。

その事実気づいた時、僕は啞然とした。

“僕は自分の意思で将来を考えたことは一度も無いじゃないか”

よく考えてみれば、この高校に入学したのも中学の教師達に進められてのこと。

結果としてここに入学出来て良かったと思えるけど、入りたくて入った訳じゃない。

僕は一体なにがやりたいんだろう…。

学校の帰り道、そう考えながら歩いていると駅前にある旅行代理店のあるパンフレットが目に入った。

“ドイツ”

「これだ…」

善は急げではないが素早くパンフレットを一枚取ると、そのまま走って早く帰るため走り出した。

駅の改札口まで来たところで、どんなに走ろうと電車が来なければ早く家に帰ることも出来ないことに気付き、俯いて赤面したのは今じゃ良い思いでだ。

家に帰ると母親が声をかけてきたが適当に返して自分の部屋に駆け込み、パソコンの電源を入れる。

起動するまでの間に先ほどのパンフレットに一通り目を通すと、起動したのを確認してインターネットに繋ぐ。

そして出てきたトップページの検索欄に“ドイツ”と打ち込みドイツの文化や歴史、町の風景等を調べ、次の日の帰りには本屋で“ドイツ語〈初級編〉”と“和独辞典”を買い、学校の勉強と平行しながら独学でドイツ語を勉強し始めた。

そしてその結果、僕はドイツの大学に進学を果たした。

「閣下、紅茶を…閣下？」

ふと聞こえたヴェルナーの声で、僕は記憶の海から現実に戻還した。

「どうかなされましたか？」

「あー…いや、ちょっと昔を思い返してただけだよ」

“昔”という単語にヴェルナーの表情が曇った。

だけれど僕の言う“昔”と彼の言う“昔”は別の物だ。

「…お兄様達のこととは伯のせいではありません。ロエスレル様はご自身の体調のせいですし、ローラン様は事故です」

「…分かってる」

亡き“今”の僕の二人の兄、ロエスレル・フォン・クウイデとローラン・フォン・クウイデ。

ロエスレル兄さんは生まれつき体が弱く、僕が十二の時に肺炎を拗らせて享年二十五歳で死んだ。

ローラン兄さんの場合は、僕の誕生日をドッキリで祝おうとして領土からオーデインに来る途中に宇宙船の事故で死亡、僕が十九の時に享年二十七歳。

こんな感じに二人とも呆気なく死んでしまったせいで、宮中では“家督を継ぎたい三男坊が暗殺した”なんて噂が飛び交ったものだ。

僕が兄さん達を殺す訳がない、家督はローラン兄さんが継いで僕は軍人として生活していく予定で兄さん達とも仲がかなり良くて、それ以上に尊敬していたのに…。

金と権力だけに貪欲なお前達と一緒にしないでくれ。

何時だかのパーティーで嫌味を言ってきたフレーゲルのアホに前述は口に出して、後述は心の中で言っちゃったのは記憶に新しい。

「そういえばヴェルナー、コンラート・リュネン中佐って知ってる？この資料によると卿と士官学校の同期みたいなんだけど」

三枚の資料の一番最後、人事局の抜擢してくれた三人目の参謀の書類に目を通してながらそれとなくヴェルナーに聞いてみると、持ってきてくれた紅茶を右手を使って僕の机に置きながら答えた。

「ああ確かにリュネンは俺の同期です…アイツも閣下の艦隊の参謀になるんですか？」

「うん、それにしても写真を見る限りは中々の好青年じゃないか」

「…閣下には劣ります」

「冗談は止してくれヴェルナー。…だがロイエンタール大佐の方が上だね、中佐には艶が足りないな」

「自重して下さい閣下。…コイツもこんな顔してますけど中々癖のある性格で、同期生達からは“斜め上行く優等生”なんて皆に呼ばれてましたよ」

「へー」

こうやって新任の参謀達の噂等の話をしていると、いかにヴェルナーが優秀なのかが分かる。

優秀な副官を持てた自分は幸せ者だと思いながら、その副官の淹れた紅茶を口にした。

「うん、美味しい」

今日もオーディンは平和だね。

03・クウイデ中将（後書き）

前回ほど時間はかかりませんでしたでしたがやっとこさ03です。

「実は転生物でした！」なんて駄目でしたか？

グリンの前世とか今世の過去話は少しずつ回想として出していく予定で、気長にお待ち下さい。

勿論彼は、原作をファンではありませんがよく知っています、双壁に反応しましたしね。

今回ののは、いや毎回多少は感じるけど、自分の書いた文章を読み返していると感じ悪くなってきました。

これは作文を書くときにも思うことなんですがね…文末が気に入らないんですよ、“た”“だ”ばかりで終わると。

人様が書いたものを読むときは気にならないと言いか感じないんですけどね…自分の文章だから過剰反応するだけでしょうか？

04・英雄着任

先日、人事局にて俺とミッターマイヤーが受け取った辞令の内容は
“イゼルローン方面の哨戒任務に当たる艦隊の参謀”
だった。

そしてその艦隊は、先のヴァンフリートにて最功労者と称されるグリンメルスハウゼン提督の艦隊の幕僚を数名を除きそのまま新しい司令官が引き継いだだけのものらしい。
その司令官もグリンメルスハウゼン艦隊の時の参謀長だ、艦隊の質には恐らく文句は付けがたいだろう。

「なにになに…」

艦隊司令官

ローエン格林・フォン・クウィデ中将

参謀長

ゲアハルト・フォン・コッセル少将

副参謀長

ロベルト・フォン・モムゼン准将

分隊司令官

テオドル・ハインリヒ・フォン・ベル少将

フェオドル・フォン・フォルスマン少将

オットー・フォン・ブロッホ准将

…なんだ、貴族ばかりじゃないか」

渡された艦隊の資料を読み上げミッターマイヤーは、それに書かれている名前を見て眉を潜めて呟いた。

「安心しろミッターマイヤー、中將の副官は平民出身の少佐だ」

恐らくミッターマイヤーはこの艦隊の噂について知らないのだろう。

同様にグリーンメルスハウゼン艦隊を年老いた司令官に代わって指揮を執り、領民の信頼を一身に受けているクウイデ伯爵家当主であるローエングリン・フォン・クウイデ中將の人柄のことも。

「ロイエンタール、俺が言いたいのはその言うことではなくてだな…」

「意外なんだろう？」

「ああ、貴族ばかりなのによくあそこまでの艦隊運用ができた…とな」

それは分からなくはない、例えクウイデ中將が如何に優秀であろうと分隊司令官や参謀の貴族達が彼の言うことを聞くととは限らないからだ。

…だが、本当に噂のことは何も知らないらしい。

まあいい、ここは疎い親友の為に噂話の一つや二つ教えてやるうではないか。

「聞くところによると、グリーンメルスハウゼン艦隊では幕僚達が旗艦の中をマラソンしていたらしい」

「はあ？」

「他にも両手にバケツを持たせ、自分の席の後ろに立たせて会議を行ったり…」

「……」

「飲み会もそれなりの頻度で行われていたそうだ」

「つまり…どう言うことだ？」

戸惑うをミッターマイヤーを横目に俺は答えた。

「気楽にやっても問題ないだろう」

今日、新たに三人の参謀がこの艦隊に着任する。

中佐一人と大佐二人、内貴族が一人で平民が二人、そして三人共ある種の問題児。

いやー…一人でやっていける自信がない。

まあだからこそその残留組の部下達だけだね。

「司令官」

「何？コッセル」

「本日が新しい参謀の着任日ですが…“アレ”を今回もやるのですか？」

ゲアハルト・フォン・コッセル少将は子爵家の次男坊。

優秀で嫌みのない兄に反抗して軍に入り前回のヴァンフリートではグリーンメルスハウゼン艦隊の副参謀長として参加した。

残留組の筆頭で、幕僚の中で最年長の四十一歳だ。

百九十を超える大男で顎髭が特徴、僕は司令官向きだと常々思っている。

「勿論」

「え？本当ですか閣下！」

「…ベル、飲み過ぎるなよ」

「大丈夫だよフォルスマン、俺は酒は強い！！」

「そう言いながら酔い潰れて俺に背負われて帰ってるのは何処のどいつだ…」

分隊司令官のテオドル・ハインリヒ・フォン・ベル少将とフェオドル・フォン・フォルスマン少将は共に三十四歳。

ベル少将は下級貴族の当主、フォルスマン少将は男爵家の三男坊で二人とも前回は准将として分隊司令官を勤めてくれた。

ちなみに二人の関係はさしずめ手のかかる子供と面倒見の良い兄と言った所。

「と言う訳だから勿論今夜は空いてるよね？」

「閣下の奢りなら喜んで」

「ブロッホ：卿は子爵家の次期当主だろうか」

「それがどうしたコッセル、いつものことだろう？」

「確かにそうだが、卿はそう言う次元じゃないだろう…」

副参謀長のロベルト・フォン・コッセル准将は三十八歳。

前回は大佐階級の参謀としての参加でベル少将と同じ下級貴族の当主、そしてヴェルナーに幕僚陣の中で最もまともな人物と言わせた男。

その評にどこか引つ掛かる所があるが気にしないでおこう。

オットー・フォン・ブロッホ准将は三十二歳。

先ほどコッセルが言ったように彼は子爵家の次期当主…なのに守銭奴まではいかないけど金銭面ではシビアな変な奴だ。

前回も分隊司令官として参加、この面子の中で唯一昇進していなかったりする。

多分艦隊戦の時の役割が地味だったからだと思うんだけど…不思議だ。

「…今日一日は艦橋に詰める予定だから書類があつたらそっちの方に持ってきてくれ、あと今夜は何時もの所に集合すること」

話が広がって収集がつかなくなる前に終わらせようと内容のまとめにかかると、「了解」だか「はい」だか真面目不真面目に三者三様の返事が返ってくる。

に艦橋の入り口まで来たとき、ドアが勝手に開き誰かが出てきた。

出てきた彼、薄い金髪にライトグリーンの少々吊っている瞳が印象的な中佐の階級章を付けた青年は、俺達を見るや流れるような動作で敬礼をした。

一瞬自分達にされていることに気付かず、慌てて返すとロイエンタールが少し馬鹿にしたような目で見てきたので軽くどついてやった。

「小官は本日付けでクウィデ艦隊の参謀に就任しました、コンラート・リュネン中佐です」

「…卿と同じで本日より参謀に就任するオスカー・フォン・ロイエンタール大佐だ」

「同じくヴォルフガング・ミッターマイヤー大佐…リュネン中佐、これからよろしくたのむ」

「…こちらこそよろしくお願いします」

お互いに軽い自己紹介と挨拶を済ませると、彼はそのまま去って行った。

俺も早く挨拶を済ませるために艦橋に入ろうとしたが、ロイエンタールが何か考え込んでいることに気づいて先に問いてみることにした。

「どうしたロイエンタール？」

「ああすまない…どうもあの中佐が気になってな」

「リュネン中佐に何かあるの？」

「ああ、あるとも。昨年憲兵隊による軍の士官や官僚の物資や資金横領の中規模な一斉検挙があっただろう？当時大尉だったコンラート・リュネンはその原因となったカイザーリング艦隊の幕僚による横領…最も実際はサイオキシン麻薬だったが、それを摘発した十数人内の一人だ」

その話なら俺も知っている、と言うか帝国で知らない者は居ない程の出来事だ。

憲兵隊・兵站統括部の下級士官と財務省や内務省の若手官僚が裏で手を組み、ロイエンタールの言ったアルレスハイムで壊滅的損害を受けたカイザーリング艦隊を皮切りに次々と摘発・検挙していった。本来なら上層部が黙っていないのだが、内何人かは後ろ楯の門閥貴族がいて手が出せず最終的には自らもその魔の手に捕まってしまうという始末。

事の始まりとなったカイザーリング艦隊から取って『カイザーリング変事』と呼ばれるそれは結果として軍の発言権を強め、原因となった者達が武官文官問わず左遷される形で幕を閉じた。

「よく卿はそこまで知っているよな…」

その情報網に関心していると、金銀妖瞳が呆れる様にこちらを見てきた。

「コンラート・リュネン自体も元々それなりに有名だった筈だが…と言うか彼のことは前に酒の席で話しただろう」

「え…！？」

ロイエンタールに言われて懸命に記憶を辿るも思い出せない。

「それよりこんな所にいつまでも突っ立って居ては邪魔になってしまう、行くぞミッターマイヤー」

「あ、ああ……」

「……酒の席での話だ、酔って憶えていないだけだろう」

最後にフォローを入れてくれた親友に感謝をしつつ、俺達はクウイデ司令官の居る艦橋へと足を踏み入れた。

「本日より閣下の艦隊の参謀に就任致しましたコンラート・リュネン中佐です」

今日から新任以来久し振りの艦隊勤務だ。

俺が配属されたのは新たに発足した……正確には頭が代わって少しだけ中身を入れ換えただけの艦隊。

「ローエン格林・フォン・クウイデ中将だ……宜しく頼むよりリュネン中佐」

目の前の男が今日からの俺の上司になるクウイデ中将だ。

前々に聞いていた噂から、実は本人に会って少々拍子抜けしている。悪い噂はさえ聞いたことはなかったがもう少し威厳がある人物だと思っていた、どうやら期待のし過ぎだったらしい。

どれほどの才能があるかと所詮貴族の甘ちゃんか、まあ威張り散ら

さないだけでしたが。

そんな俺の気持ちを察したのか、中將の隣に居る士官学校の同期兼戦友が若干睨んで来た。

ハイゼ、去年散々俺達と暴れた卿は人のこと言えんだろう。

「はっ！…では失礼致します」

「ああ待つて！！」

「何か？」

「今夜、幕僚皆で歓迎会をやるんだけど…暇？」

「……………はい？」

飲み会の噂は知っていたが、まさか本当だったとは。

…訂正しよう、初代クウイデ伯爵家当主と同じ瞳を持つ男は、その由緒正しいく歴史ある名家出身とは思えないほどのユルイオーラと貴族らしからぬ人間性をお持ちのようだ。

艦橋を出た所で俺と同じ様に中將に挨拶に来たであろう二人の大佐と会ったが、動揺していた俺は名前を完全に聞き逃した。

…それにしても飲み会か。

俺、酒は強くないんだがな。

「本日よりこの艦隊の参謀として着任します、オスカー・フォン・ロイエンタール大佐です」

「同じくヴォルフガング・ミッターマイヤー大佐です」

来たよ、本日最大の試練である双璧の着任挨拶。

しかもリユネン中佐と殆ど入れ替わる様に入って来た、何？何なの？心の準備は全然万端じゃないんだけど…。

取り合えずミューゼルの時もそうだったけど、まずは悪い印象だけは持たれない様にしなければ。

あ、中佐の時何も言わないで帰しちゃったな…失敗した。

「ローエングリン・フォン・クウィデ中将だ。貴官らのことは噂でだが多少知っているよ」

「噂…ですか？」

ミッターマイヤー大佐が聞き返してきた、その表情は焦った様な戸惑った様な…まあそんな感じだ。

それに機嫌を良くした僕はヴェルナーの諫める様な視線を無視して、コッセルを始めとする幕僚陣から聞き出した噂と昔イゼルローンに居たときに目撃した事件を記憶の海から引っ張りだした。

「例えば…初対面の酒場で憲兵隊が呼ばれる程の殴り合いの大喧嘩をして、そのまま殺人事件に巻き込まれたり」

「他には酒場で一般兵に難癖付けた憲兵隊相手に喧嘩を売って次の日上司に呆れられたり」

「あと酒場で他人の喧嘩に巻き込まれて喧嘩の張本人達を倒さ、閣下その位に」…まあ他にも色々聞いてるよ」

全部酒場での武勇伝だけだね。

「それは兎も角、今夜卿らの歓迎会として飲み会を開く予定なんだけど…参加できる？」

酒は人類の友と某魔術師も言っていた。

美味しい酒を出すいい店をあの三人に教えてやろうじゃないか。

04・英雄着任（後書き）

酒だ！酒だ！成人して最初に飲む酒は果実酒と決めている杉崎です。

よわな酔わないウメツシュ

は飲んだことありますが、あれ20歳以上が飲むことを“想定”って書いてあるんで大丈夫ですよ…ね？

クウイデ艦隊の幕僚陣の顔触れは大体分かったと思います。

でも彼等がこの面子のまま最後まで行くとは限りませんのでご了承下さい。

本当に恐いです原作キャラは、なんで最後のグリーン一人称では必要以上に喋らせませんでした。

次は…酒場かイゼルローン方面へ出発か…どうしましょ？

取り合えず、九州に逝ってきます。

閑話休題 01・戦士と言う名の酒飲みの集い（前書き）

今回は短い、00と同じ位の長さです。

あと、グリーンが何か語ってますが気にしないで下さい。

閑話休題 01・戦士と言う名の酒飲みの集い

僕は赤ワインを好んで飲む、そして必ずと言っていいほど一番最初は赤ワインを口にする。

何故なら僕、ローエン格林・フォン・クウイデは軍人だからだ。軍人とは人を殺す為の職業、だから殺せば血が流れることは必須で、例えば白兵戦で無かるうともその敵兵達の血飛沫を被ることはない。

そして僕が殺してきた彼らは血と一緒に、何かしらの後悔と実家の家族はたまた恋人や友人達への思いも垂れ流すんだ。

確か今は完全に廃れたキリスト教では“最後の晩餐”と言うやつでイエス・キリストが“赤ワインは私の血だ”みたいなことを言っただけらしい。

宗教は前からあまり興味は無かったから詳しくは知らないが僕はそれに習い、その葡萄から出来ている赤いアルコールを含んだ液体を敵兵の血と思っている。

だから僕は赤ワインを飲む、体に取りすぎると良くないと言われるアルコールと一緒にその血も後悔も思いも全て。

それが一人の人間としての僕の贖罪の様なものとして、一人の軍人としての僕の敵に対する最大限の敬意として。

あ、宗教……あー嫌な物を思い出した。

なんでこんな時に、気分わるいなあ……

昔から宗教って争いの種にしかないよね、例えばキリスト教の十字軍とか……あれは最終的にただの殺戮略奪軍に成り下がって聖地奪還の任を忘れて結局地球が人類から見捨てられるまで奪還出来ず

仕舞いだ。

そして僕たちの先祖の欧州人とかだって、自分達の為だけに略奪惨殺もつやりたい放題で王を殺しキリスト教を押し付け、アフリカ民族やインディアン達を奴隷とした。

本当、人間って学習しない生き物だよ。

だって我らがルドルフ大帝だって……

どうしてこうなった。

私は今日の前のカオスにハイゼと共に対峙している。

…ああ、どうしてこうなった。

何処か遠くを見つめ、既に七本目となった空のボトルを一人で転がし八本目を現在進行形で飲んでいるクウィデ中将。

兄への愚痴やら悪口やらを話ながら黒ビールをイツキするコッセル…彼の周りのジョッキの数は最早数えたくもない。

フォルスマンはコッセルの話を聞いているように見えるが、完全に寝ている。

ベルは三杯で脱落、テーブルに突っ伏して微動だにしない。

ブロッホは二、三杯飲んだあと、酒瓶を幾つか拝借して帰っていった。

リユネン中佐は飲んで吐き飲んで吐きの繰り返し…彼はそろそろ止めなければマズイかもしれない。

ミッターマイヤー大佐とロイエンタール大佐は…言い方が悪いが二人だけの世界の中に居る、と言うかロイエンタール大佐がミッターマイヤー大佐を離さないと言うか…幕僚陣の中で最もフレンドリーなベルが二人に話しかけた時の剣幕が…ロイエンタール大佐はもし

かしてミッターマイヤー大佐しか友人が居ないのでは…？
彼の噂からは仕方がないかも知れないが、流石に一人だけは…あり
そうで悲しいな。

「どうしてこうなった…」

普段の酒盛りは酷く無かった、いや酷かったがここまで酷くは無か
った。

「……モムゼン准将」

ハイゼが憐れみの視線を向けてきた。
だったらこの状況を打破してくれ！！

…正気に戻り周囲を確認したクウィデ中將が解散を言い渡すのはこ
の一時半後のことだった。

閑話休題 01・戦士と言う名の酒飲みの集い（後書き）

ぱっぱと一時間半で書き上げました。

…特になにも考えずに書いた結果がこれだよ！！

グリンの語りはあんま気にしないでやって下さい、彼と作者が傷付くんで。

（え、グリンは兎も角お前はいつでもいい？……それがどうした！！）

苦勞人設定のモムゼン准将の見方はちょっとあれですよ。

ロイエンタールは大勢しかも今日初めて会った人達と飲むのが嫌で、勿論他にも理由はありますが…ミッターマイヤーはそんな親友の気持ちを感じて付き合っていたのです。

ミッターマイヤーとしては少しリユネンやベルが心配なのですが…やっぱりロイエンタールの方がほっとけないし話すのも楽しいのです。

…どうしてこうなった！？

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5825w/>

銀河英雄伝説 “ 朧月の伯爵 ” ローエン格林・フォン・クウィデの記録

2011年11月21日05時54分発行